問５、喫煙群と非喫煙群、各々10万人について疾病A、BおよびCの罹患率調査を行い、次の結果を得た。(p64　例題5－3より)

罹患率

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 喫煙群 | 非喫煙群 |
| 疾病A | 75 | 10 |
| 疾病B | 3000 | 1000 |
| 疾病C | 6000 | 5000 |

(１)相対危険とは何か。

　関連の強固性を示す。非曝露群における罹患率と比べ、曝露率における罹患率が何倍になるかを示す。

(２)寄与危険とは何か。

　もしも、要因Xへの曝露が起こらなかったとすると、曝露群において減少することが期待される罹患率の大きさを示す。要因Xの対策を行うとすると最高どれくらいの罹患率が減少するのかを示す。

(３)どれが喫煙によって疾患に影響与えているか、またそれはなぜか。(記述で出ています)

　各疾病の相対危険を計算すると、

　　　A　75／10＝7.5

　　　B　3000／1000＝3

　　　C　6000／5000＝1.2

よって相対危険(リスク比)が最も大きいのは疾病Aである。すなわち喫煙と疾病Aとの関係が最も強いと言える。

(４)どれが喫煙をやめたら一番効果があるか、またそれはなぜか。(記述で出ています)

　各疾病の寄与危険を計算すると、

　　　A　(75‐10)／10万＝65／10万

　　　B　(3000‐1000)／10万＝2000／10万

　　　C　(6000‐5000)／10万＝1000／10万

　よって禁煙により、寄与危険の最も大きい疾病Bの罹患率減少が、最も期待される。